発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町2
電話 ③3033 ③3034 番
編集兼発行人 山下 開
半年間1.000円 送料共

北炭闘争スト は中止

かねて北炭労連の期末手当獲得と、石炭政策の確立をめざし、二十九日早朝から突入を予定していた二十五時間ストライキは、突入前日夜、炭労の指令にもとずき中止となった。

詳細は本紙次号で伝えるが、なお闘争そのものは続行される。

北炭では合理化が出てくる重要な情勢にあり、炭労も重大決意をせまられている。

被爆者が明かした体験

今年もまた、原爆被爆記念日がやってくる。それは、人間の恐ろしい記憶を呼び起こす日である。

三十一年前の八月のこと、六日に広島で、九日に長崎で、ボタンを二つ押しただけで投下された原子爆弾。そのため、今も消えてゆく命がつづいている。

被爆者――と名のつく人びとがいる。この大牟田だけでさえ二百人以上を数えるという。体の内部深く爪うちかけ、いつ出てくるかわからない原爆症におののき、あるいは世間体を思っては身が被爆者であることをひたかくしにかくしながら、ひっそりと生きているこれらの人びと。

ここに紹介するのは、そんな人びとのなかの一人に聞いた体験である。平気で行われた、恐るべき犯罪。希望により匿名にするが、その人は私たちに何を訴えようとしているか？

吐きつづけた回虫

不思議につながった命

私たちの一家は、長崎市の爆心地にほど近い町に住んでおりました。そのころ、三菱長崎造船所に技術者として働いていました主人は、毎日そこから通勤していたのでした。

私たちにはすでに、マスミという生後七カ月になったばかりの赤ん坊がおりました。

造船所といえば軍需工場でしたので仕事がいそがしく、その日も主人は出勤しておりました。

カンカン照りの日でしたが、私は隣家の奥さんの親切にあまえまして、赤ん坊のマスミをあずけ、遠くの町にある配給所まで配給米をもらいに出かけてゆきました。

私は綿入れの防空ズキンをかぶって、配給所のおじさんの机の前に立っていました。

午前十一時過ぎでした、たしか爆発の音を聞いたようにも思います。

気がついたら、私は、影も形もなく崩れ落ちた配給所の家の下敷になっていたのです。

何とか助からなければ……という気になり、私は自分のうえに覆いかぶさっている崩壊家屋の下から、やっとはい出すことができました。

自分の目を疑いました。長崎は地上からすっかり、消え去っていたのです。

真っ黒い煙がやってきました。いや、黄いろだったようにも思いますね。その煙のなかに、何か星のようなものがキラキラ舞っていたことが忘れられません。

そのとき私は、自分の首筋にひりひりと痛みを感じたのでしたが、別に気にもとめませんでした。きっと放射能によるヤケドだったのでしょうがね。

あ、自分には赤ちゃんがいる。とにかくいっときも早く家に帰りつかねば……、と気ははやります。でも、家という家はペシャンコになり、道もなくなっていましたから、どこがわが家の方角やらわかりませんでした。でも、こちらだと思われる方向に向かって歩き始めました。

どこもかしこも、死人だらけでした。

着ている着ものがぼろぼろになり、ほとんど裸同様の姿でさ迷い歩く人が現われ、その数がしだいにふえていきます。みんな両手をちょうど幽霊が人を招いているあの手のように前に曲げていましたが、その腕からは、すっかり剝げ落ちた筋肉やら皮やらがだらりと垂れさがり、何ともいいようのない姿でした。

なかには、歩いてゆく私の脚に、いきなりしがみついてきて、「助けてください」「水をください」とさけぶ人もいましたが、地獄といえばあのときの長崎こそが地獄だったんですよ。

ともかく、私が住んでいた町にたどりついたのは、その日の夕方のことでした。

もちろん、その町も家という家は木っ葉みじんに吹っ飛んでしまっていました。心配だった赤ん坊のマスミは近くの防空壕のなかに、あずかってくださった隣家の奥さんの手で移してもらっていたことを知りました。ほっとしたものの、ところが、赤ん坊を助けてくださったかんじんの奥さんご自身は、被爆によってその後すぐご自分の子どもさんとともに、息をひきとっていかれたのでした。

一方、折角助かったというのに赤ん坊のマスミの命も、けっきょくは消えゆく運命からのがれることができず、私の胸に抱かれたまま、とうとう息をひきとってゆきました。忘れもしません、それは八月十五日のラジオが伝えてくれる天皇陛下のあの玉声を聞きながらのなかのできごとだったのです。これほど皮肉なこともありません。

近所の方がたのお力で、そこらじゅうに散らばっていた材木を拾い集めて積みあげ、そのうえにまだ生後七カ月だというマスミの幼い遺体をのせて焼いて、ダビにふすことができました。

そのとき主人は初めて、タンカで運ばれながら私のもとへ帰ってまいりました。主人のことなんかすっかり忘れていましたが、主人自身も被爆したとき、ひどい重傷を負っていたことがわかりました。

私は、やっぱり放射能を浴びていました。これは次つぎに死んでいった被爆者によく見られた症状だったのですが、ひと晩じゅうゲエゲエとかい虫を吐きつづけ、赤痢患者同様にひどい下痢がつづいて、もうこれでおしまいと、生きてゆくことをあきらめたことさえあります。

ある晩のことです。おフロにいって頭を洗おうと思い、櫛で髪の毛をすきましたところ、髪の毛がゾクッといっぺんに、固まって抜けてきたのにはびっくりしました。とうとう丸坊主になってしまったのでした。そのためしばらくは、頭にフロ敷をかぶって暮らしたものでした。

不安の消える日は一日もありませんでしたけれど、さいわい私の命はその後不思議にもつながり、今は体に別状もなく、こうして主人とお店を経営してきております。今年主人が五十九で、私が五十六歳です。思えば、長崎で被爆したのは、主人が二十七歳で私が二十四歳のときのことでした。

あの日、こんな悲惨な遺体が、道にころがつていた。

保安団交に厳しい目

災害うちつづく炭鉱

今三池労組は会社に「保安管理体制の強化」などを目指す二十二項の保安要求をつきつけ団体交渉を重ねているが、坑内保安状況の悪化にともない、きびしい目が注がれている。

三池労組は六月職場の実態のなかから集約した、前記「保安管理体制の強化」など二十二項にわたる要求を確認、会社に提出。ひきつづき、保安団体交渉を重ねている。

団体交渉のなかで、坑内では夏場のおとずれとともに保安悪化がきわ立ち、とくに十三日には四山鉱で起きた感電事故のため、試用員の鶴戸一徳さんが死亡しているほどだ。

坑内保安の悪化は、何も三池炭鉱ばかりにきまったことでなく、炭鉱全体に見られ、重大災害がうちつづいている。

これは明らかに自民党政府がすすめている、独占資本奉仕一点張り、一方的な利潤追求から一歩も出ない石炭政策が原因となっている。

昨年七月新しい（?）石炭政策の答申が出されると、こんどもまた待っていたとでもいうようにして災害続発。以来六十人近い炭鉱労働者の命が奪われた。

答申は、一節でいっている――「向う三年間の間に、政策助成金も含めて、私企業体制として黒字経営を目指す」。

とかく世間に広がっている「石炭見直し」論を口実につかいながら、返ってこれまで通りの石炭政策をおし通す。そこには、もともと資本あって労働者はない。この政策が各炭鉱で具体的に推進されていくかぎり、人間無視の狂暴な合理化、生産第一主義が強行されることになるのは避けられないことだ。

三池炭鉱（有明炭鉱を含め）では、今年にはいってから早くも死者三人、数えきれない重軽傷者が出ている。

このとき、保安法規改正の動きも急ピッチ。今も行政面の指導力の弱さが目立つとき、この動きもさらに重視されなければならず、夏場のおとずれ、保安団交の進行とともに、保安問題は日ごとに重大性を加えている。

炭労、期手闘争妥結

会社、配分要求を無視

かねて四十万円の要求をかかげてすすめてきた期末手当闘争を、炭労は、七月二十三日スト突入前に示してきた会社回答三十三万一千円をもって妥結した。

三池労組の場合、職場には不満が大きく残ったことはいうまでもないが、内容は次の通りである。

期末手当……三二五、〇〇〇円
生産協力金……一〇、〇〇〇円
福利厚生資金……六、〇〇〇円

合計三十三万一千円で、支払日は八月八日（日曜）となっている。

この妥結について、三池労組はそれならば配分を民主的なものにして、要求にいくらかでもこたえるべきだと、さっそく次の配分にもとずく支払いを会社に要求した。

本人給　一律一九八、六〇〇円（六〇％）
家族給　一人当り四、〇〇〇円
勤続給　一年に　一、五〇〇円（以上で一二％）
所得給　右三項の残額とする。（二八％）

会社は右に対し、次の方針を示してきた。

本人給　一律一四六、一六三円（四四・一九％）
家族給　一人当り三、〇〇〇円
勤続給　一年に　一、二〇〇円
所得給　一五三、七六六円（四六・四九％となる）

こうして、会社は二十八日開いた団体交渉で、こんども組合のせめてもの要求を無視し、会社の配分方針を強行する意志を明らかにした。ここに、配分交渉はついに決裂した。

なお、港務所関係での配分交渉も決裂したが、詳細は省略する。

また、北炭の期末手当闘争は重大化してきた。